

日進月歩するデジタル製品を、「使い勝手」ではなく、「実装された新技術」と「製品の革新性」をテーマにレビューしていくコーナー。

塩田紳二

ビジネス FOMA M1000

(NTTドコモ)

誰でも買える無線 LAN 内蔵、フルブラウザ搭載の携帯電話

無線 LAN と携帯電話の微妙な関係

米国の雑誌やニュースサイトなどでは、3G 携帯電話と無線 LAN のどちらが次世代の無線通信の主役なのか？ といった記事を見かける。日本では、携帯電話と無線 LAN を比べるなんて、「非常識」といった考えが普通だが、米国では様子が違う。なにせ、まだアナログ携帯電話を使っていたり、デジタルでもデータ通信がほとんどできない 2G の携帯電話が大多数だからだ。

それで、米国では、3G も無線 LAN もスタートがほぼ同時。なので、どっちに投資すべきか？ ということになるのである。すでに 2.5G で、大多数のユーザーが i モードやメールなどのデータ通信を常用している日本とは状況が大きく違うのである。

逆に、このような日本の状況が、無線 LAN と携帯電話の間にミゾを作った。どちらも同じくインターネットアクセスやメールが利用できるが、前者は、携帯電話会社のシステム、後者は、パソコンと同じシステムとなる。ある意味、敵同士というてもいい状態だ。

これまで、無線 LAN を搭載した携帯電話は世の中に存在してはいたものの、個人で購入することはできなかった。というのは、その無線 LAN は、あくまでも企業内での VoIP を利用した内線用であって、大量導入を前提にしていた製品だからである。つまり、NTT ドコモの N900iL は、単に社内用の通信手段として無線 LAN を使っているだけで、無線 LAN をデータ通信の手段として利用させたいわけではなかったのである。

マルチローミングな携帯

この M1000 の最大の特徴は、スマートフォンということではなく、複数の通信手段を持ち、ある意味、世界中どこでも最適な通信が可能という「マルチローミング」とでもいうべき機能である。

携帯電話としては、W-CDMA、GSM/GPRS に対応していて、日本国内ばかりでなく、海外のほとんどで通話だけでなく、データ通信が可能。さらに無線 LAN を持つことで、ホットスポットや社内、自宅といった環境で、W-CDMA よりも高速な 802.11b による通信ができるわけである。

そのために必要なのが、フルブラウザと POP/IMAP に対応したメールソフトであり、M1000 はどちらも搭載している。

これがあれば、自宅や社内では、無線 LAN ルーターに接続してメールを読んだり、ウェブページを閲覧するなど、ほぼパソコンや PDA と同じインターネットアクセスが行える。ソフトさえあれば、他のインターネットアプリケーションにも対応が可能だろう。外出先や海外出張でも、W-CDMA や GPRS を使って同じようにインターネットアクセスができる。

さらに、Word や Excel といった PC で作成したドキュメントの閲覧を可能にする Pixel Viewer や、音楽、ビデオ再生が可能なマイクロソフトの Windows Media Player も搭載している。これで、PC から送られてきたメールの添付ファイル、インターネットで見つけた PDF ファイルなどを見ることができる。少なくとも閲覧環境は、パソコン並といえる。

Symbian OS を搭載し、ソニーエリクソンなどが採用する UIQ 系の GUI を持ち、ネイティブアプリケーション動作の可能性もある。となれば、メールやウェブ以外のインターネットアプリケーションにも対応できる可能性もあるわけだ。こうした通信環境があるおかげでスマートフォンらしさも生きてくる。

M1000 は、ビジネス FOMA という新ブランドを冠する点からも、さまざまな難しさがあることを感じさせる。しかし NTT ドコモがケータイのオープン化を予感させる端末を発売するという事実は、非常に大きな意味を持っている。

[Reviewer's View]

M1000は、無線LAN、W-CDMA、GSM/GPRSそしてBluetoothとほとんどの無線通信機能を内蔵している。自宅や社内など、高速な通信環境のある場所では、無線LANを使うことで、低コストで高速通信が利用でき、さらに、国内、海外でもデータ通信が可能で、ある意味、世界中どこでも利用できるといういい。

インターネットのメールアドレスを持ち、主にPCを使うユーザー、つまり、iモード系のサービスが元々必要のないユーザー向けの製品といえる。

M1000は、モトローラが開発したW-CDMA携帯電話。さまざまな通信方式に対応したスマートフォンである。OSにはSymbianを採用し、Javaやネイティブアプリケーションがインストール可能になる予定。自宅などで通信料金を気にせず無線LAN経由でウェブやメールが使えるようになるのは魅力的。ビジネスFOMAと呼ばれているのは、iモード系のサービスが利用できず、従来の携帯電話とは区別するためだと思われる。フルブラウザOperaを内蔵しWord、Excelファイルの閲覧も可能。



外観は見るからにPDAライクなデザインだ。「ビジネスFOMA」のブランドらしく、企業ユーザーに使いやすいという印象。



背面もシンプルなデザイン。写真では見えにくいですが、カメラの上部にはBluetoothとWiFiのロゴがある。本体にはドイツ製と表記されていた。



左右の側面の上部に見えるスリットはスピーカー。試作機のため「Engineering Prototype」の文字が見える。



大型で、かなりしっかりとしたクレードルが付属する。ただし、本体の外観も含めてデザインは変更される可能性がある。



フルブラウザは、PC上で見るのとほとんど同じ表示が可能。マルチメディア再生のためにWindows Media Playerを搭載している。



FLORA Se270

(日立製作所)

パソコン本体には一切データを 保存しない究極のセキュリティPC

最高のセキュリティのために
パソコンからHDDを取り除いた

日立のFLORA Se210は、ハードディスクを持たないノートPCだ。これは、同社が提供するSecure Client Solutionの一部をなすもの。なぜ、ハードディスクがないのかといえば、そこに情報が記憶されないことによって、ノートPC自体を紛失、あるいは盗難に合ったとしても、情報が漏洩する心配をなくすためだ。

動作にはサーバーとなるマシンが必要で、専用ソフトウェアを使い、サーバー側の画面表示をネットワーク経由で行う。簡単にいえば、WindowsXPのリモートデスクトップと同じだが、同社が開発した独自のプロトコルが使われており、従来のものよりもネットワークでの転送効率が高いという。また、サーバー側には、通常のデスクトップPCも利用でき、WindowsXPだけでなく2000や98でも利用可能だ。

WindowsXP Embeddedを使い、
USBメモリーも接続禁止

FLORA Se210は、OSとしてWindowsXP Embeddedを採用し、その上でクライアントソフトウェアを動作させる。OS自体は内蔵のフラッシュメモリーに記憶されており、電源を入れ直せば、必ず初期状態に復帰する。つまり、設定ミスなどで起動できなくなることはありえないし、ノートPCの中で最も故障率の高いデバイスであるHDDがないためにトラブルも発生しにくい。また、セキュリティ上を確保するために通信系デバイスは接続できるが、USBメモリーを初めとするUSB接続の記憶デバイスはすべて利用が禁止されている。

接続先などは、USB接続するKeyMobileモジュールに記憶されており、利用時には、これを接続しないとクライアントマシンへのログイン自体ができない仕組

[Reviewer's View]

ネットワークの普及は、情報漏洩が起こりやすくなるという結果を招いたが、逆にネットワークを使って、セキュリティを向上させることも可能だ。日立のFLORA Se210は、リモートディスプレイ専用マシンで、HDDがなく、マシン自体が盗まれたとしても情報が漏洩するおそれがない。しかも3G携帯やPHS、ホットスポットを使えば外出先での利用も可能である。企業系では、10年ぐらいのレンジで、このようなシステム構成に移っていく可能性もあるだろう。

みだ。これにより接続時の安全性が確保される。動作にネットワークが必要だが、既存ソフトの利用とセキュリティを両立させたシステムといえるだろう。セキュリティが求められるながらも、漏えい事件は頻繁する現状では、ここまで徹底したシステムが必要なのだ。

FLORA Se210は、日立のSecure Client Solutionとして提供されるノートPC。市販のマシンを流用したのではなく、専用の筐体である。管理を企業内部で集中して行えることもあり、セキュリティだけでなく、TCOの削減にも寄与する。なお、HDDがないからといって他のノートPCよりも長時間使えるというものではないようだ。通信が必要なため、ネットワークや通信カードで電力を消費してしまうからだ。3G携帯やPHSでも十分利用可能とのことで、移動中の利用も可能。



LAN Tank(SOTO-HDLWU)

(アイ・オー・データ機器)

いまやNASはメディアサーバー化。 さらに内部を公開、ユーザーの開発を期待。

NASはメディアサーバーを 目指す？

ハードディスク関連の周辺装置は、以前から多数の製品があったが、このところの主流は、ネットワークに接続が可能なハードディスク。ブロードバンドともにLANが普及すると、複数PCから同時アクセス可能なNAS(Network Attached Storage)製品が増えてきた。

背景には、単なるUSB接続HDDは低価格化で、HDDを含まないいわゆる「箱もの」が大量に出回り、もはやメーカーにとってはあまり儲かる製品ではなくなってきたという事情がある。

そのNASも、単純な製品では、HDDを含まない箱だけが出回り始め、最近では、玄人志向の「黒箱」のような製品がヘビーユーザーを中心に人気を集めている。これは、NASではあるが、内部的にはOSとしてLinuxを使っているため、ユーザーがカスタマイズが可能な製品だ。特にこれらを映像や音楽を共有するメディアサーバーのように利用するのが「流行」である。

挑戦者ブランドから白箱

こうした動きに対応してアイオーデータ社の低価格ブランド「挑戦者」から登場したのが通称「白箱」こと、LAN Tankである。HDDが2台まで内蔵可能で、SH-4 CPUを採用、Linuxが動作する。しかも最初からHTTP、FTP、WebDAVなどのプロトコルに対応する。iTunesの音楽データ共有、wizdによる

メディアサーバー機能を持つのが特徴だ。通常のNASと違うのは、Windowsのファイル共有プロトコル(いわゆるNBT:NetBIOS Over TCP/IP)には対応していないこと。つまりNAS本来の機能よりも、メディアサーバー機能を優先させた製品という。

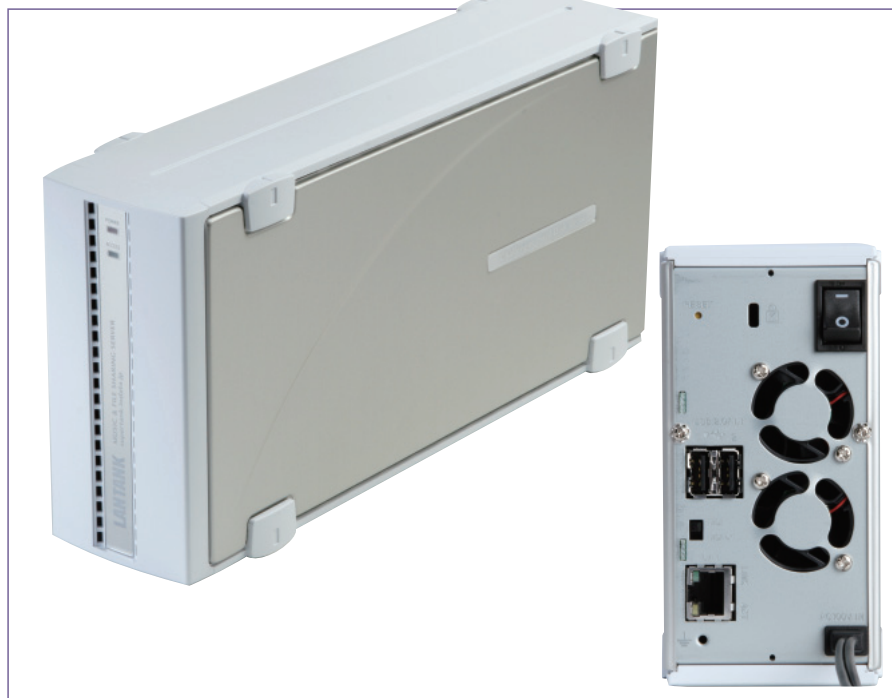
ただ、LAN Tankを含め、ほとんどのNAS製品は、CPUパワーが低く、ファイル共有やメディアサーバーとして使うと性能がすぐ頭打ちになってしまう。おそらく、年内には、x86系CPUを搭載し、サーバーとしてもそこそこの性能を持つ製品が登場しそうな感じである。

一般家庭にHDDレコーダーとブロードバンド(LAN)が普及した結果、高機能なNASはPCユーザーだけじゃなく、一般家庭でも必要となるだろう。

[Reviewer's View]

すでにNASも、HDDなしのキットが出回る状態。その中で、差別化点として、メディアサーバー系の機能を提供したり、複数HDDに対応した製品が登場しはじめた。LAN Tankは、ファイル共有よりもメディアサーバー機能に特化したNASキット。ファイル共有はWebDAV(ウェブフォルダー)を使い、いわゆるWindowsのファイル共有機能は持っていない。ハードウェア的には2台までのHDDを内蔵可能。また、内部はLinuxを使っており、プログラム開発ができるなら、自分で機能追加ができる。

LAN Tankは、NAS/メディアサーバーの組み立てキット。ユーザーが用意した2台のHDDを内蔵できるが、組み立てには、別途パラレルATAのHDDを接続可能なデスクトップPCが必要。これを使って制御用ソフトウェアであるLinuxなどをインストールするのである。2つのHDDでミラーリング、スパンニングが可能で、さらにiTunesの音楽共有やWebDAVによるファイル共有、ネットワークメディアプレーヤー(アイ・オー・データのAVeL LinkPlayer)対応などの機能を持つ。





[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp